

# 『恋する女たち』における 「創造的生」の可能性

染谷昌弘

## 1. はじめに

筆者はかつて、『恋する女たち』における「崩壊」と「再生」についてと題する拙論を書いたことがある。その中で、「崩壊」というロレンスの概念をもっぱらジェラルドだけに当てはめて論じたのだが、今回改めて読み直してみると、「崩壊」というロレンスの現代に対する認識がもっと多様で奥深いことに気づいた。そこで、ジェラルドだけではなく、他の登場人物たちにも焦点を当てながら、さらに「崩壊」だけではなく、それに関連する「腐敗」、「分裂」、「終末」というロレンスの作品中のキーワードと考えられる言葉を抽出し、その意味を掘り下げて考えてみることによって、ロレンスが「現代」に対してどのような概念あるいは問題意識を持っていたのかを再考する必要性が生じた。また、このことによって、筆者が以前拙論のタイトルの中に入れた「再生」の意味も自ずと修正されることになる。ロレンスにとって「崩壊」、「分裂」、「腐敗」、さらに「終末」の要素を抱える「現代」が主にバーキンが解答を提示する「再生」へとどのような経路でたどり着くのか、あるいはそもそもたどり着くことができるのか、を論考することが本論の目的である。

## 2. ジェラルドの「悲劇」

ジェラルドは父親から受け継いだ炭鉱会社を精力的な近代的改革と合理化によって成功に導いた。しかし、その精力的な改革の意志による成功は皮肉なことに、あるいは悲劇的なことに自らを「崩壊」に向かわせるもの

となってしまう。第4章「ダイヴァー」でグドランは「それはそうよ。彼は精力家よ。あれほど精力に満ちた人を見たことがないわ。残念なことは、彼の精力がどこへゆくか、それから何が生まれるかということね」と問いかける。姉のアーシュラは「わかってるわ。最新式の機械装置を装備することによ。」(*Women in Love* 99) と返す。二人の姉妹はこの時点でジェラルドの辿る運命をすでに予感していた。『恋する女たち』と同時期に書かれ、この作品を読み解くためには避けては通れない評論『精神分析と無意識』でロレンスは次のように述べている。

The mind is the dead end of life. But it has all the mechanical force of the non-vital universe. It is a great dynamo of super-mechanical force. Given the will as accomplice, it can even arrogate its machine-motions and automatizations over the whole of life, till every tree becomes a clipped teapot and every man useful mechanism. So we see the brain, like a great dynamo and accumulator, accumulating mechanical force and presuming to apply this mechanical force-control to the living unconscious, subjecting everything spontaneous to certain machine-principles called ideals or ideas. (*Psychoanalysis and the Unconscious* 47)

まさにジェラルドそのものを裏付ける主張である。彼の精力的な「意志」は最新式の機械装置を取り付け、人間も機械の原理に従い生産活動をすることを強いる。「すべての自然なものを理想とか観念とかと呼ばれる何がしかの機械の原理に従属させる」のである。生を支配しコントロールしようとするジェラルドの精力的な「意志」が結局のところ行き着く場所は自己崩壊である。事実、彼は物語の最後で雪山で死を遂げることになる。同じ『精神分析と無意識』で「精神は生を支配すべきではない」とロレンスは主張する。

But mental consciousness is not a goal; it is a cul-de-sac. It provides us only with endless appliances which we can use for the all-too-difficult business of coming to our spontaneous-creative fullness of being. It provides us with means to adjust ourselves to the external universe. It gives us further means

for subduing the external, materio-mechanical universe to our great end of creative life. And it gives us plain indications of how to loosening of false, automatic fixations, the brave adherence to a profound soul-impulse. This is the use of the mind – a great indicator and instrument. The mind as author and director of life is anathema. (*Psychoanalysis and the Unconscious* 48)

「知的意識」は「存在の自発的かつ創造的な完成」を準備するものに使われるべきであるとしている。そして、「外部の物質的、機械的宇宙を、我々の創造的生の大目的に従わせる手段を与えてくれる」ものであり、「機械の自動装置に陥るのを避ける方法をはっきりと指示してくれる」ものであると言う。そして、「まちがった機械的な固執をゆるめること、深い魂の衝動を果敢に守り通すこと」が「知的意識」の働きだとし、「生を創り出し支配するものとしての精神は呪われるべきだ」とまで豪語している。この「知的意識」は特に注意をすべき言葉である。ロレンスの「知的意識」は物事を分析的に捉えるだけの意識ではない。それは直観によってあるいは感受性によって対象のなかに直に入り込み、対象の全体を認識する能力でもある。そしてその後対象から身を引き離し、距離を置いて対象と対峙する能力である。そしてその対象は無意識の領域まで及ぶものである。

第5章『汽車』でバーキンが汽車でロンドンに行く途中でジェラルドに「教えてくれよ、何のために生きるんだい？」と本質的な問いを投げかける。ジェラルドは「ぼくは働くために、何かを生産するために生きるんだと思う。」と答える。バーキンはこの時この成功を遂げている企業人の中に、「完璧で上機嫌な鈍感さ、異様できらきらする悪意を見て取った」のだった。そしてそれは「生産というもっともらしい倫理から閃き出ている」(*Women in Love* 107-108)ものだった。F. R.リーヴィスは「何かを生産するために生きるんだ」というジェラルドの個人的な問題の解決には「深い反人間的な衝動の存在」が暗示されていると述べている (*Leavis* 160)。我々読者はここに産業資本主義の文明の過程に生じる本質的な個人の心の病弊を見ることになる。また、リーヴィスは「全一性への細やかな関心のみが、上からの強奪的な支配を意味する倒錯を防ぎうるのである。」と述べている (*Leavis* 178)。ジェラルドの「鈍感さ」や「悪意」は

人間の「全一性」にたいする細やかな「知的意識」が欠けていることから生じている。この「知的意識」の欠如はジェラルドだけにあてはまるのではない。ハーマイオニの偏狭な精神による何でも知って自分のものにしたという知的所有欲もこのこれから生じている。ジェラルドが自らの精力的な「意志」を働かせるということは、左記の「何のために生きるのか」という問いと関わってくるが、結局は彼は自己の生に対する責任を拒否するということになるのである。言い換えれば、彼には生自体に意味があるという意識が欠如していたのだ。「深い魂の衝動を果敢に守り通し」「存在の自発的かつ創造的な完成に至る」ための道具として十全に細やかな「知的意識」を働かせることが、ジェラルドに欠けていることであった。

しかし、ジェラルドは自らの欠落を完全ではないにしろ意識するようになる。彼の「知的意識」は働き始めていた。夕方、何もすることがないとき、彼は自分が何者か分からなくなって、突然恐怖を感じる。鏡に映る自分の顔が仮面に見えることがあった。そして、その仮面が壊れて何もなくなり暗黒が訪れ、全く意味のない泡沫になりはしないかと恐れることがあった。この恐怖や不安は紛れもなくジェラルドの「生」が生き残っていることの逆説的な証である。皮肉にもそして幸運にもジェラルドは自らの欠落を知る予兆を感じる機会を得たのである。幸運にもと言うには彼の死はあまりにも悲劇的なのであるが。そして彼が死をもってしか「生」を獲得できなかったというのは誠に皮肉という他はない。ジェラルドの崩壊は精神的な依存の対象であった父の死によって拍車がかかり、いよいよ避けられないものとなる。彼がものごとくに意味を感じ実在感を持つためには、死の過程の持つ恐ろしさにさらされる必要があったのである。それでも、彼は自分が崩壊して意味のない泡沫に帰すという恐怖から逃れるために、恋人のグドランに「愛」による救済を求める。このときの彼は自暴自棄に近く、暗闇を歩き回り父の墓を掘り起こすが、土と花のにおいにひるみ目指すグドランの部屋に泥だらけの靴で上がりこむ。ジェラルドはあの「鈍感さ」でグドランに接するが、彼の「愛」は一方的な欲求であり、依存であるためにグドランには到底受け入れられるものではなかった。そして、彼のグドランへの「愛」は先ほど述べた、「全一性」の欠如から反人間的な「悪意」とならざるを得なかった。グドランに救済されないと分かると彼は彼女を今度は憎むようになり、とうとう彼女の首に手をかけるが、途

中で我に返ってチロルの山の中に入りそこで滑落して雪の中で死を遂げる。ジェラルドが死を遂げた白銀の雪山は非人間的で冷たく、「創造的な生」や「深い魂」とは正反対の世界の象徴である。しかし、ジェラルドが自らの仮面を意識し意味のない泡沫に帰すことに恐怖を覚え、自暴自棄になって最後には雪山で死を遂げることには大きな意味があったと言える。ジェラルドに起こったことは本当の意味で悲劇である。丁度ギリシャ悲劇のオイディプス王が最後の最後で自分の来し方のすべてを知るように、ジェラルドもまた、「主キリストよ、それでは死ななくてはならないのですか」(*Women in Love* 575) と何かを悟ったように静かに語りかけ、自ら死という官能を選択することになる。彼はこのとき自分はどうしても死をもってしか「生」を獲得することができない運命にあると自覚したのである。このときジェラルドは最後の一瞬に「全一性」を獲得したと言えないだろうか。あるいはジェラルドは遅きに失したと言うべきだろうか。結局はジェラルドの生命が絶たれた以上、最後の一瞬で「全一性」を獲得できたとしても、彼にとってはそれを活かす機会はない。パーキンは「こんなふうになることは望まなかったのだ」(*Women in Love* 581) とジェラルドの硬直した屍を見て心の中で叫ぶ。パーキンはジェラルドは命を落とす必要はなかったと考えている。「悲劇」を招くことなく、「生」を獲得できたはずだと考えていた。このパーキンの重要なコンセプトについては後に論ずることにする。少なくともジェラルドが死を代償として最後の一瞬に獲得した「生」の認識は将来パーキンとアーシュラの二人の関係に活かされることになる。ジェラルドの死には新たな「生」が内包されていて、二つを分析的に切り離すことはできない。そのような意味でジェラルドの悲劇的な死は20世紀の文明の再生を予兆するものでもあったのである。このようにロレンスはジェラルドをいわば十字架にかけて購いを施さなければならなかったとも言える。ジェラルドの悲劇はロレンスが生きた20世紀前半のヨーロッパの文明の悲劇の象徴である。それは現代文明の「終末」の象徴でもある。ロレンスは最後の長編小説『チャタレイ夫人の恋人』で「現代は本質的に悲劇的な時代である。」(*Lady Chatterley's Lover* 5) と述べている。この悲劇はまさにジェラルドの悲劇のことであったのである。しかし、ハーマイオー二にはジェラルドに与えられた「全一性」の認識というこの最後のチャンスは与られていない。ハーマイオー二には最後まで

で、彼女の頭の中だけの知性の働きによって、支配を続けようとする。これもまた彼女の運命である。

### 3. 「分裂」、「腐敗」、「生」そして「終末」

第19章「月明かり」の中でバーキンが水面に映る月に憑かれたように執拗に石を投げて支配の象徴であるその月の形を壊そうとする有名なシーン、さらに、アーシュラとの「愛」についての意見の食い違いの対話の後で、バーキンはかつてハリディのアパートで見たことがある西アフリカ産の女性像のことを思い出す。

She knew what he himself did not know. She had thousands of years of purely sensual, purely unspiritual knowledge behind her. It must have been thousands of years since her race died, mystically: that is, since the relation between the senses and the outspoken mind had broken, leaving the experience all in one sort, mystically sensual. Thousands of years ago, that which was imminent in himself must have taken place in these Africans; the goodness, the holiness, the desire for creation and productive happiness must have lapsed, leaving the single impulse for knowledge in one sort, mindless progressive knowledge through the senses, knowledge arrested and ending in the senses, mystic knowledge in disintegration and dissolution, knowledge such as the beetles have, which live purely within the world of corruption and cold dissolution. That was why her face looked like a beetle's; (*Women in Love* 330)

「彼女の種族が神秘的に死滅して以来、つまり、感覚と明晰な精神との間の関係が破れて経験がすべて神秘に満ちて官能的な一つのものになって以来、数千年がたったに違いない」とバーキンは述懐する。この女像の属する種族が生を営んでいたアフリカでは肉体と精神は一つであり、この二つは互いに補完関係にあり、どちらも欠くべからざるものであった。これら二つが切り離されると、「感覚を通して考えもなく前進する」しかなく、「感覚のうちに捕らえられてそこで終わる」ことになる。それはつまりは

「善なるもの、聖なるもの、創造と生産的幸福への欲求がいつしか途絶えて」しまったからに他ならない。そして、これらのことは「バーキンの内にまさに起ころうとしていること」だと言っている。つまりバーキンはこの「分裂」が生じている「現代」に生きているのである。また、バーキンはこの西アフリカの像を思い出す直前のアーシュラとの対話で、彼は「ただ静かな霊的な交わり、ただそれだけを求めていた」が、すぐ後で「自分が求める観念に従って彼女に対していたことは誤りだったかもしれない」と踵を返す。さらに、「どうして自分がつねに肉欲の充足について語るのだろうか」と自問し、それら二つは結局は「矛盾」だと結論づける (*Women in Love* 329-330)。バーキンにおいても精神と肉体の分裂は起こり始めていた。そして、その「分裂」の後にバーキンもこの像と同じように「神秘に満ちた官能的な一つのもの」に至る道が残されていた。このように、かつては肉体と精神は一つであったが、数千年前にこの像が属する種族が「神秘的な死」を遂げてから、種族の人々が人間として保持していた精神が肉体から分離して、ついには純粋な官能である肉体だけが残っている西アフリカの像にバーキンは深く感銘をうけている。そして、「現代」の状況の様に肉体が精神から「分離」し、二つが同時に存在したままでは肉は「腐敗」することになる。アフリカの女像が象徴するような単一で「官能的な一つのもの」に墮ちる必要がある、とバーキンは考えている。リーヴィスは現代人のこのような考えは20世紀の「現代人の追いつめられた状況」(Leavis 167) から起因していると言っている。この女像が「腐敗」の肉を蝕む「甲虫」のように見え、この「甲虫」が抱くような認識を求めようとする刹那的な衝動を彼は覚える。このときの彼には自らも次の引用文の中の「アフリカ的な理解の道へ、分解の神秘を知ることの中へ落下してゆく道」が残されていたのである。彼は西アフリカの女性像から様々なことを想起する。

There is a long way we can travel, after the death-break: after that point when the soul in intense suffering breaks, breaks away from its organic hold like a leaf that falls. We fall from the connection with life and hope, we lapse from pure integral being, from creation and liberty, and we fall into the long, long African process of purely sensual understanding,

knowledge in the mystery of dissolution[...]

There remained this way, this awful African process to be fulfilled. It would be done differently by the white races. The white races, having the arctic north behind them, the vast abstraction of ice and snow, would fulfill a mystery of ice-destructive knowledge, snow-abstract annihilation (*Women in Love* 330-331)

「落ち葉」のように「魂」が「生や希望との結びつきから脱落」し「純粹に官能的な認識、崩壊の神秘のうちの認識」というアフリカ的な理解の道を進むことになるとバーキンは考えている。そして、「背後に極北を、氷と雪の広大な抽象をもつ白色人種」はそれらの「官能的な生」の認識を「氷による破壊」と「雪による抽象的絶滅」によって達成すると言っている。「氷」や「雪」にたとえられるヨーロッパの「抽象」がこの認識に至ることに拍車をかけることになる、と言っているのである。この様に「落ち葉」のごとく「現代」の観念や精神から「生」が「落下」することによって、単一の「生」の復活を遂げようというのである。落ち葉が地に落ちて土壌を肥やし、再び生を育む生の大きな循環をロレンスは意識している。

第14章「ウォーター・パーティ」でバーキンは、後にジェラルドの妹のダイアナが「ウィリー・ウォーター」という貯水池に浮かぶ遊覧船から水に落ち溺死するその貯水池でアーシュラに対して、「この小さな池の匂いがわかる？」(*Women in Love* 238)と問いかける。この池はかすかに腐敗臭を放っていた。「生」が「分離」して「腐敗」し「生」が死にかけている「現代」の象徴である。

‘But what other? I don’t see any other,’ said Ursula.

‘It’s your reality, nevertheless,’ he said, ‘the dark river of dissolution. – You see it rolls in us just as the other rolls – the black river of corruption. And our flowers are of this – our sea-born Aphrodite, all our white phosphorescent flowers of sensuous perfection, all our reality, nowadays.’  
(*Women in Love* 238)



世界に明るさを与え、天国へ通じる「銀の河」とは正反対の「崩壊の暗い河」、「腐敗の黒い河」があって、それが今日の現実だと話す。そして、美の女神であるアフロディテはここから生まれ出た花であり、グドランとジェラルドも同じようにこのような「破壊的創造」のなかに生息している、と話す。またこのすぐ後で、バーキンは「もしも自分たちが終末であるならば、自分たちは始まりではない、始まりは終末の後にやって来るのだから」、とアーシュラに語る。アーシュラは「あなたは悪魔ね」と言い放つ。バーキンは「われわれは自分たちは何であるのかを知った方がいいと思っているだけだ」と言い返す。さらに、「あなたは私たちが死を知ることだけを望んでいる」というアーシュラの言葉にバーキンは「君の言うとおりでね」(*Women in Love* 240)と答え、自分の言っていることに気付かされる。しかし、バーキンは「現代」の「腐敗」、「死」をしっかりと知ることが、まず第一に必要であり、そこから何らかの解決が生まれると考えている。ジェラルドのような死をとまなう「終末」をバーキンは望んでいるわけではもちろんない。バーキンはジェラルドについて「彼は純白と雪への全面的な崩壊の前兆としての使者なのか？」と自問する。「全一性」に至るための西欧文明の終末の先触れをジェラルドが予兆しているのだろうかとバーキンは疑念を抱いている。ロレンスはこの頃自らの思想的な中核をなす、『黙示録論』を書いている。我々はその中に終末についての彼の奥深い洞察を見ることができる。第一次世界大戦を経験したロレンスは20世紀が精神や観念が偏重されてあまりにも「生」を蔑ろにしていると考えていた。時代の流れに身を任せて手をこまねいていたらジェラルドのような「悲劇」を生むことになる。ロレンスにとってはヨーロッパの文明の終末ということは何ら荒唐無稽な絵空事ではなかったのである。

#### 4. 「創造的生」の可能性

バーキンは「ぼくは我々がみなそうだとは思わない」、「ある人々は暗い腐敗の純粋な花、百合の花だ。しかし、温かい、焰のようなバラの花もあっていいはずだ。」(*Women in Love* 239)とアーシュラに語る。これはバーキンとアーシュラはジェラルドが辿った死をとまなう「破壊的な創造の過程」あるいは「終末」への道とは違う「創造的な過程」を模索し始め

ていることを示している。そして、「なら、これだけしか残されていないのか？我々の創造的生の時代は終わってしまったのか？」（*Women in Love* 331）と自問する。「生」を獲得し再生を図るにはジェラルドが辿った道しか残されていないのだろうかかとバーキン思索している。これがバーキンが抱えている最大の「現代」に対する問題意識である。ジェラルドのような悲劇的な終末の後に咲く、聖書にも登場する純粋な「百合の花」ではなくて異教的ともいえる「焰のようなバラの花」を開花させる可能性を模索していたのである。ジェラルドの「悲劇」、未来派を地で行く芸術家のレルケ、シニシズムに陥っているグドランそしてハーマイオーニの精神的な支配など大きく「現代」の文明の悪弊を象徴する人物たちに対して、ロレンスはバーキンとアーシュラの関係の中に解決を見出そうとしている。バーキンが西アフリカの女像を思い出す場面のすぐ後でバーキンの心理状態は一転して次のように展開する。

Suddenly his strained attention gave way, he could not attend to these mysteries any more. There was another way, the way of freedom. There was the paradisaical entry into pure, single being, the individual soul taking precedence over love and desire for union, stronger than any pangs of emotion, a lovely state of free proud singleness, which accepted the obligation of the permanent connection with others, and, with the other, submits to the yoke and leash of love, but never forfeits its own proud individual singleness, even while it loves and yields. (*Women in Love* 331-332)

「アフリカ的な道」をジェラルドが辿る運命にあり、彼は世界が白さと雪の中に崩壊することを知らせる前兆となっているのかも知れないと考え、すっかり恐ろしくなり、疲労し、「とつぜん奇妙な、緊張しきった注意力は衰え去り、彼はこれ以上この神秘性を追っていくことはできなくなった」。そして、「他の道」があることに気付く。ジェラルドの「悲劇」を回避する道である。それは「純粋で単独な存在への至福の参入」であり、しかも、「他者との永遠の結合の義務を受け入れる」というものであった。これはロレンスの「星の均衡」という思想である。ロレンスはバーキンと

アーシュラとの関係性の中に問題の解決を見出すように物語を進めていく。それはアーシュラへの求婚の際に男女関係に関してのバーキンが提起している規範に多く見て取れる。その規範は「存在の自発的かつ創造的な完成」への不断の細やかな関心によって成就する。この細やかな関心は偏狭に陥らず、「全一性」をいつも考慮する。そして、ジェラルドに象徴される文明の終末への流れに完全に巻き込まれることはなく、それにいつも距離を置いている。バーキンはアーシュラにこのような規範を理解させようとして何度も言葉を変えて説明している。

‘There is,’ he said, in a voice of pure abstraction, ‘a final me which is stark and impersonal and beyond responsibility. So there is a final you. And it is there I would want to meet you – not in the emotional, loving place – but there beyond, where there is no speech and no terms of agreement. There we are two stark, unknown beings, two utterly strange creatures, I would want to approach you, and you me. – And there could be no obligation, because there is no standard for action there, because no understanding has been reaped from that place. It is quite inhuman, [...]’ (*Women in Love* 208-209)

バーキンは完全な放心状態で「あるのは、原形質の、没我的な、責任を超えた、最終的な私です」と話す。そこにあるのは「二つの硬い、知られざる存在」であり、「二つの全く不思議な生き物」であり、「それは全く非人間的です」と言う。これら二つの存在が互いに「接近」しようとしていて、そこには「何の基準もない」。バーキンはここでアーシュラに左記の西アフリカの女像が象徴する単一の「官能的な生」を保持している未知の存在様式の自覚を促している。二人の関係はハーミオニーがジェラルドに対していたときのような知的に理解しようとするによりもたらされる所有や破壊ではない。彼の「知的意識」は明らかにそれとは別種である。「最初の赤裸な単細胞の有機体が個人だということに注目しよう。それは特定の個人であって、エネルギーの単位のような数学的単位ではない。」(*Psychoanalysis and the Unconscious* 28) とロレンスは述べている。このような特定の個人のいわば知られざる「生」を持つ他者としてバーキンは

アーシュラに対するのである。このあたりは読者にとってかなり神秘的な内容に思えるかもしれないが、リーヴィスはこの部分について、「これまで書かれたものを聡明に読みとることから生まれてくる認識力と感応力以上の解釈能力を読者から要求しない」と述べている (Leavis 188)。

‘He is not a man, he is treacherous, not one of us.’ said itself over in Hermione’s consciousness. And her soul writhed in the black subjugation to him, because of his power to escape, to exist, other than she did, because he was not consistent, not a man, less than a man. She hated him in a despair that shattered her and broke her down, [...] (*Women in Love* 149)

ハーミオーニはパーキンの変わり身の速さを「人間じゃない」と形容する。これは、彼女の知的な支配から「逃れる力、別な生き方をする力」をパーキンが保持していることを意味する。パーキンの変わり身の速さは意志ではなく自発的な「生」に従う能力であり、ロレンスの「知的意識」が活動しているということでもある。

One man isn’t any better than another, not because they are equal, but because they are intrinsically *other*, that there is no term of comparison. (*Women in Love* 161)

ここでもロレンスの規範が述べられている。我々は「本質的に他者」であるから、一方的な意識による支配や所有は実行されない。人が他の人より優れているとか、平等であるとかといった一面的な意識的な尺度では人を計ることはできないと述べている。パーキンがアーシュラに接近する仕方は無意識内の自発的な「生」に自ら従い、それを阻害する意識的な知性による支配と所有の力を排除するのである。

第14章「ウォーター・パーティ」では夕暮れにランプの薄明かりの中でジェラルドとグドルーンが向かい合いボートを漕いでいる美しい場面がある。

‘There is a space between us,’ he said, in the same low, unconscious voice,

as if something were speaking out of him. And she was as if magically aware of their being balanced in separation, in the boat. She swooned with acute comprehension and pleasure.

‘But I’m very near,’ she said caressingly, gaily.

‘Yet distant, distant,’ he said. (*Women in Love* 243-244)

二人の間の距離は接近しながらも離れている。そのバランスのとれた微妙な距離によってボートは一方に偏ることなく、進んで行くことができる。ボートの重力と浮力が安定を保っている。このバランスは「全体性」への細やかな配慮によって達成される。夕暮れの中にところどころにランプの明かりが揺れ、静かでくつろいだ二人の水上でのボート漕ぎは、ジェラルドが最終的に辿った悲劇とは異なるロレンスの想像力が生んだ「創造的な生」の象徴と言える。これによって、ジェラルドが悲慘的な運命を逃れることのできる男女間の規範的な関係の象徴である。このように、ロレンスはバーキンとアーシュラとの間に最後に成就する新しい「愛」の可能性を説き、ジェラルドに代表される「現代」の運命を克服し、そのシナリオを書き換えようと試みたのである。

しかし、このひと時の夕暮れの静かなボート遊びの最中、突然大きな叫び声が聞こえ、静寂が破れる。ジェラルドの妹のダイアナ・クリッチがボートから水中に落ちて溺死したのである。「ぼくたちの家族には一つのことがつきまってるんだ」(*Women in Love* 251)とジェラルドは運命めいたことを口にする。ジェラルドは水面下には彼の「意志」と「知的意識」ではどうすることもできないで絶望的になってしまうような不可思議な広大な世界があることを強く意識する。ジェラルドとグドルーンが乗るボートは一つの可能性としてジェラルドが代表する「現代」の問題を克服しようとする「創造的な生」を象徴するものであった。しかし、水面下にはまたもや拒否したはずの暗い運命が存在していたのである。この両義性は何を意味するのか。バーキンとアーシュラの新しい「愛」は虚飾であるのか。また、最終章でのオープンエンディングは何を意味するのか。ロレンスが生きた20世紀前半は、依然として、ジェラルドという人間の生き様で診断を下された「本質的に悲劇的な時代」である。また、ロレンスの「星の均衡」が象徴するものが果たして社会を動かし変革を遂げられるか

どうかはまた別の問題である。ロレンスは「現代」の持つ悲劇性を回避する決定的で実際的な方策を具体的に提示し得たわけではない。ロレンス自身はつきりとした確信の中にいるわけではない。それほど「現代」が抱える問題性は多様であると同時に底が深いとも言える。ロレンスの言説の裏側には終末という文明観が絶えず見え隠れしている。死は絶えずぴったりと「現代」に寄り添うようにして存在しているのであった。しかし、だからこそ、果敢にもロレンスはジェラルドに象徴される「現代」の「悲劇」を回避し、文明の終末を拒否して、「創造的な生」という本質的な解決の可能性をバーキンとアーシュラとの「愛」という形で読者の目の前に提示してみせたのである。彼の最後の長編小説、『チャタレイ夫人の恋人』の冒頭の「現代は本質的に悲劇的な時代である。だから、我々はそう思うことを拒否するのだ」がロレンスの最後の「現代」にたいする見解であった。ところで、ジェラルドとグドルーンが乗るボートは何処に行き着こうとしているのか。「船着場に向かって漕ぎましょうか。」とグドルーンが問いかけると、ジェラルドは「何処へでもいいよ。漂流させておこうよ。」と答える (*Women in Love* 245)。ここには明確な二人の行き先は示されていない。二人の「生」のたどり着くところはその時可能性として示されているだけであった。

## 5. 終わりに

以上、ロレンスの評論『精神分析と無意識』がジェラルドの「悲劇」を裏付けていたこと。「分裂」、「腐敗」、「生」そして「終末」というロレンスの作品から抽出される言葉が20世紀の現実の側面を十分に表現していたこと。そして最後にロレンスの核心的なテーマと考えられる「創造的生」が、文明の「悲劇」を回避し、悪弊を正す鍵となる、まさに「可能性」があるのではないかということ。以上の3点を中心に論じてきた。筆者が「創造的生」の可能性という曖昧な表現をしたのは、ロレンスの一見アンヴィヴァレントとも採れる言説は、まさにそれこそが「生」の誠実な表現であるからに他ならないからである。

最近のロレンス研究者のT・ピンクニーは『恋する女たち』は「事実上モダニスト芸術の百科全書である」(Pinkney 96-97)と言っている。「百

科全書」に例えられる程に、ロレンスはモダニストとして「現代」が孕む諸問題を見抜き、それらを読者の前に提示し、鋭い解説を施した。もちろんそれはロレンスが生きた時代的、社会的背景が彼をモダニストたることを要求したからである。しかし、ロレンスはモダニストの枠をはみ出し人間の本質を深くまで掘り下げ、素直に「生」を肯定している。結局のところ、筆者はT・ピンクニーの言うように、『恋する女たち』は事実上はモダニストの小説でありながら、本質的には古典主義の系譜であるとする「古典主義者の文学の伝統に連なる変種」(Pinkney 97)という解釈に与するのである。

#### 参考文献

- Lawrence, D. H. (2002) *Apocalypse and the Writings on Revelation*. CUP.  
Lawrence, D. H. (1985) *Lady Chatterley's Lover*. London: Penguin.  
Lawrence, D. H. (2005) *Psychoanalysis and the Unconscious and Fantasia of the Unconscious*. Mineola, New York: Dover Publications, Inc.  
Lawrence, D. H. (1989) *Women in Love*. London: Penguin.  
Leavis, F. R. (1955) *D. H. Lawrence Novelist*. London: Chatto and Windus Ltd.  
Pinkney, Tony (1990) *D. H. Lawrence*. Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf.  
染谷昌弘 (1995) 「『恋する女たち』における「崩壊」と「再生」について」『東洋大学大学院紀要』第32集、234-246. 東洋大学大学院.